

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：11201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720146

研究課題名(和文)ジャンヌ・ダルク処刑裁判を題材とする文学創作に関する研究

研究課題名(英文)Study of literary works on the Trial of Joan of Arc

研究代表者

中里 まき子 (NAKAZATO, MAKIKO)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：40455754

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円、(間接経費) 270,000円

研究成果の概要(和文)：まず、ジャンヌ・ダルク処刑裁判を題材とする20世紀の文学作品(ジャン・アヌイ『ひばり』(1953)、ベルトルト・ブレヒト『ルーアンのジャンヌ・ダルク処刑裁判1431年』(1954)、ティエリー・モールニエ『ジャンヌと判事たち』(1949)等)を体系的に取り上げ、「ジャンヌ・ダルク処刑裁判記録」をはじめとする歴史資料との比較を試みることにより、各作家の創作の独自性を浮かび上がらせた。続いて、ジョルジュ・ベルナノスがエッセー『戻り異端で聖女のジャンヌ』(1929)において寡黙なジャンヌ・ダルクを提示したことに着目し、言語をめぐる同作家の問題意識との関連性を考察した。

研究成果の概要(英文)：First, I compared some literary works on the Trial of Joan of Arc (The Lark (1953) by Jean Anouilh, The Trial of Joan of Arc of Proven, 1431 (1952) by Bertolt Brecht, Joan and her Judges (1949) by Thierry Maulnier, etc.) with the minutes of this trial, and I clarified the originality of each literary piece. Secondly, I studied the Joan's silence, described by Georges Bernanos in his essay "Joan, Relapsed and Saint" (1929), to conclude that this silence reflects the author's view of language.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：ジャンヌ・ダルク ジョルジュ・ベルナノス 戻り異端で聖女のジャンヌ 新ムーシェット物語

1. 研究開始当初の背景

(1) ジャンヌ・ダルク (1412~1431) に靈感源を求めた作家としては、15世紀のクリスティーヌ・ド・ピザンをはじめ、シェークスピア、シラー、ヴォルテール、サンド等が挙げられ、その数はとりわけ20世紀に急増する(ペギー、ベルナノス、ショー、アヌイ、ブレヒト、トゥルニエ等)。ところが、この人物を素材とする文学作品を研究するための適切な視座は提示されておらず、その文学史上での意義も明確にされてこなかった。

(2) ジャンヌ・ダルクを素材とする文学についての従来の研究は、彼女の物語を一種の「神話」と見なし、この人物に捧げられた多数の作品を通時的に俯瞰するものと、作家ごとの個別研究の枠内でなされたモノグラフィーとに二極化する傾向があり、そのことが、諸作品の正当な評価および文学史への合流を妨げてきたともいえる。

(3) ジャンヌ・ダルクをめぐる文学については、特に日本における研究の立ち後れが顕著であった。2012年のジャンヌ・ダルク生誕600年に向けて、フランスでは多数の書籍が刊行され、文学研究誌の特集号が生まれ、シンポジウムや祭典、展示等が各地で相次いで企画されたが、日本ではそういった動きはほとんど見られなかった。

2. 研究の目的

本研究は、ジャンヌ・ダルクをめぐる文学創作の正当な評価を試みるものである。特に、ジャンヌ・ダルク処刑裁判を題材とする作品が20世紀前半の時期に数多く制作されたことに着目して、「裁かれるジャンヌ」の形象が、当時の社会状況および文学思潮とどのような関係を取り結んでいたかを探り、その意義と射程とを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) ジャンヌ・ダルク処刑裁判を題材とする20世紀前半の文学作品を体系的に取り上げ、「ジャンヌ・ダルク処刑裁判記録」をはじめとする歴史資料との比較を試みることにより、作家たちの解釈の独自性や問題意識を浮かび上がらせる。

(2) 「裁かれるジャンヌ」への言及のある、ジョルジュ・ベルナノスらの政治評論やエッセー等を検討することにより、この形象への作家たちの傾斜が、20世紀前半の社会状況(世界大戦、市民戦争、全体主義の抑圧、等)に対する危機意識に動機づけられていたことを明らかにする。併せて、そういった著作が呼び起こした反響を書評等から探ることにより、「裁かれるジャンヌ」への関心の増大の意義について、適確に把握できるようつとめる。

(3) 20世紀文学においては、「人間」と「言語」との葛藤を孕んだ関係が前世紀以上に鋭く意識され、それは、多くの作家たちによって創作の主題として探求された。本研究では、こうした20世紀文学の傾向と、「裁かれるジャンヌ」をめぐる創作の隆盛との関連性を明らかにする。特に、現代作家たちが、「裁かれるジャンヌ」の人物像を、「裁判記録」が伝えるジャンヌ像から逸脱させていく様態を探ることにより、彼らにとってこの少女の形象が、言葉をめぐる問題関心を掘り下げ、作品において表現する際の重要な契機となっていたことを例証する。

(4) 「裁かれるジャンヌ」の形象が20世紀文学に与えた影響の射程を明らかにするため、従来はジャンヌ・ダルク関連作品と見なされてこなかったベルナノスの小説『新ムーセット物語』(1937)のヒロインを取り上げ、同作家のエッセー『戻り異端で聖女のジャンヌ』(1929)におけるジャンヌ像との比較を試みる。

(5) フランスの研究者や研究組織、とりわけオルレアンのジャンヌ・ダルク文献センターおよびボルドー第3大学の研究センター「モデルニテ」の研究者と緊密な連携をとり、研究資料の提供や助言を受け、フランスで研究成果を発表する。

4. 研究成果

(1) 1840年代に校訂版が刊行された「ジャンヌ・ダルク処刑裁判記録」は、この人物の言動を伝える貴重な歴史資料であり、多数の文学作品の着想源ともなった。しかし、20世紀の作家たちは、「裁判記録」を参照し、その重要性を認めながらも、自らの創作においては、とりわけジャンヌが聞いたという神のお告げの「声」と、ジャンヌ自身の「声」に関して、史実を「歪める」傾向がある。作家たちが創作において史実から逸脱していく方向を、次の二つの流れとして整理することができる。

① 「裁判記録」を読む限りでは、ジャンヌは5ヶ月にわたる裁判の間、神の声を信じて導かれ続けた。しかし、ジャンヌ・アヌイ『ひばり』(1953)、ベルトルト・ブレヒト『ルレアンのジャンヌ・ダルク処刑裁判 1431年』(1954)、ティエリー・モールニエ『ジャンヌと判事たち』(1949)等の戯曲では、神の沈黙に苦しみながらも、裁判官たちに果敢に抗弁する彼女の姿が描かれる。20世紀の抑圧的な社会状況を経験した上記劇作家たちは、この雄弁で論争的なジャンヌ像を通して、自らの意志で権力に立ち向かう個人を称揚したと考えられる。

② 一方、ジョルジュ・ベルナノスは、エッセー『戻り異端で聖女のジャンヌ』において、法廷で裁かれるジャンヌを寡黙な少女とし

て描いており、彼女の雄弁さを強調する他の作家たちの傾向を疑問視している。ベルナノスがスペイン市民戦争に直面して執筆した政治評論『月下の大墓地』(1938)と、上記エッセーを併せて読解した結果、同作家が、戦乱を招いた社会の腐敗の根底にある言語の欺瞞性を告発するために、そういった言語の不吉な作用によって魂を汚され、精神的な死へと逢着するジャンヌ・ダルクの形姿を提示したことが確認された。

上記①と②を総合すると、アヌイら劇作家たちとベルナノスとは、「裁判記録」の記述から距離をとり、逸脱していく方向は異なるものの、いずれも社会状況への自らの問題意識を反映させながらジャンヌ・ダルク像を構築したことが明らかになった。こうした研究の成果を、ジャンヌ・ダルク生誕600年を記念してオルレアンで開催された国際シンポジウム「ジャンヌ・ダルク：歴史と神話」において発表する機会を得た。

(2) 日本フランス語フランス文学会東北支部大会において、シンポジウム「ジャンヌ・ダルクのさまざまな表象～生誕600周年を記念して～」を主催した。その際、黒岩卓氏(東北大学)による中世の聖史劇におけるジャンヌ像をめぐる発表や、寺本弘子氏(アリアンス・フランセーズ仙台)による映画におけるジャンヌ像をめぐる発表との対比により、ジャンヌ・ダルクを寡黙な少女と捉えるベルナノスの解釈が、歴史的に見ても、同時代の他の作家と比較しても、独自性が極めて高いことが浮き彫りとなった。また、時代を超え、国境を超えて、多様なジャンルにわたって試みられてきたジャンヌ・ダルクを題材とする創作を、研究対象とすることの意義や今後の課題について、多数の研究者と議論することができた。

(3) ジョルジュ・ベルナノスの複数の小説作品やインタビュー記事等の検討を通して、上記(1)-②で示した知見を、次のように掘り下げた。

① ベルナノスは、第一次世界大戦終戦直後から言語の欺瞞性や空虚さを意識するようになり、その問題意識を、後のスペイン市民戦争を通して先鋭化させた。寡黙なジャンヌ・ダルク像への同作家の傾斜は、言語をめぐるそうした認識に根ざしていると考えられる。

② ベルナノスは、スペイン市民戦争の際に、欺瞞的な言葉を駆使する聖職者や政治的指導者たちと、彼らの言葉を理解できないまま内乱の犠牲となり死んでいく、素朴で寡黙な貧者たちとの対比を見出し、そのことを、処刑裁判における裁判官たちとジャンヌ・ダルクとの対比を援用しながら糾弾した。

③ ベルナノスは処刑裁判を、ジャンヌ・ダルクの純粋な言葉が奪われ、この少女が寡黙になっていく過程と捉えているため、エッセ

ー『戻り異端で聖女のジャンヌ』では、「裁判記録」が伝える彼女の言葉を引用することに消極的である。さらに、ベルナノスの著作全体を俯瞰すると、ジャンヌ・ダルクを表象することへの、同作家の両義的な態度が浮かび上がる。というのも、政治評論等のテキストの随所でこの少女に言及しているながら、小説等のいわゆる文学作品において言及することは少なく、あるとしても断片的なものに留まるからである。大人の言葉の犠牲となった少女について、ベルナノスは、自ら大人の言葉で語ることに対し、慎重であったと考えられる。

④ ベルナノスの小説において、ジャンヌ・ダルクの形象が直接的に描かれることはないが、小説『新ムーシェット物語』のヒロインは、「裁かれるジャンヌ」を着想源として造型されたと考えられる。その論拠として、本作品とエッセー『戻り異端で聖女のジャンヌ』において、酷似する場面が提示されること、さらに、ベルナノスが、ムーシェットの死とジャンヌの死を、イエス・キリストの受難になぞらえていることが挙げられる。

⑤ ムーシェットの人物像を、言語表現の可能性を奪われた、寡黙な少女として造型しつつ、それでも彼女の内的世界を言葉で伝えることは、表象不可能性への挑戦にほかならない。『新ムーシェット物語』のエクリチュールは、言語の喪失の意識を抱くベルナノスによる、新たな言語を紡ぎ出そうとする実践的な試みであった。

上記の成果を、国際シンポジウム「世界大戦期の文学創作と女性たち」において発表したところ、日本学術振興会外国人招聘研究者としてシンポジウムに参加したエリック・ブノワ教授(ボルドー第3大学)から、ベルナノスのジャンヌ・ダルク解釈への福音書の影響を探るよう示唆を受けた。この示唆を踏まえて検討を続けたところ、ベルナノスのエッセー『戻り異端で聖女のジャンヌ』におけるジャンヌの沈黙と、マタイ福音書に見られる捕縛されたイエス・キリストの沈黙との間に類似性を見出すことができた。

(4) エッセー『戻り異端で聖女のジャンヌ』等においてベルナノスが言及している作家シャルル・ペギーもまた、『第二徳の神秘の大門』(1911)等の作品において、イエス・キリストの沈黙とジャンヌ・ダルクの沈黙を重ね合わせていたことが確認された。ジャンヌ・ダルクを寡黙な少女と捉える両作家の立場は、他の作家と比べて特異なものであるが、それが、社会における言語への眼差しのみならず、福音書の解釈とも関わりを持つことについて検討し、明確化を図ることは、20世紀文学の研究にとって極めて重要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

① Makiko NAKAZATO, « Jeanne d'Arc dans la littérature du XX^e siècle en France et au Japon », *Actes du colloque « Jeanne d'Arc : histoire et mythes »*, Presses Universitaires de Renne, 2014 (掲載決定), 査読無

② 中里まき子、「20世紀前半の文学におけるジャンヌ・ダルク：ペギーとベルナノス(シンポジウム「ジャンヌ・ダルクのさまざまな表象～生誕600年を記念して～」報告)」、*Nord-Est* (日本フランス語フランス文学会東北支部会報)、第6号、2013、pp. 1-7、査読無
http://genesis.hss.iwate-u.ac.jp/sjllf-tohoku/bull/Nord-Est_No6.pdf

③ Makiko NAKAZATO, « Images de Jeanne d'Arc au Japon », *Jeanne d'Arc : une image à l'épreuve du temps*, Ville d'Orléans, 2012, pp. 103-109, 査読無

〔学会発表〕(計3件)

① 中里まき子、「ベルナノスの文学における少女たちの沈黙」、国際シンポジウム「世界大戦期の文学創作と女性たち」、2013年6月6日、岩手大学(岩手県)

② 中里まき子、「20世紀前半の文学におけるジャンヌ・ダルク：ペギーとベルナノス」、シンポジウム「ジャンヌ・ダルクのさまざまな表象～生誕600周年を記念して～」、日本フランス語フランス文学会東北支部大会、2012年11月3日、岩手県立大学アイーナキャンパス(岩手県)

③ Makiko NAKAZATO, « Jeanne d'Arc dans la littérature du XX^e siècle en France et au Japon », *Colloque « Jeanne d'Arc : histoire et mythes »*, Centre d'Études Supérieures sur la Fin du Moyen Âge (Université d'Orléans), 2012年5月9日～2012年5月10日、オルレアン美術館(フランス)

〔図書〕(計1件)

① 中里まき子、他、朝日出版社、『トラウマと喪を語る文学』、2014、pp. 225-235

6. 研究組織

(1)研究代表者

中里 まき子 (NAKAZATO, MAKIKO)
岩手大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号：40455754